

足立史談

第578号

2016年4月15日

足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

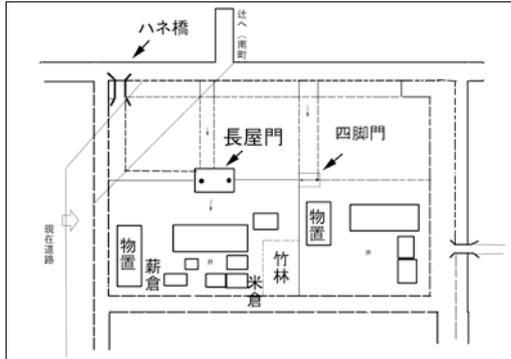
(28-308)

伊澤隆男

沼田船津家第七代＝船津久五郎(文測)に連なる人々(二)

日光御成道鳩ヶ谷宿本陣船戸家の主要な分家である、沼田船津家と里船津家は、ともに本陣第四代船戸久兵衛から出ており、久兵衛の三男の徳右衛門が沼田へ、五男(末子)の助右衛門が里へと分家し、それぞれ約三十町歩の田畑山林を

所有し名主あるいは有力な大百姓であった。左の図は、明治期の里船津家の建物の配置であり、ほぼ百メートル四方の敷地の周りを堀が囲んでいる。堀は旧鳩ヶ谷市教育委員会の発掘調査で、幅五メートル深さ一二メートルの大溝であったとしている。図の左上には、跳ね橋が見られる。



【上】昭和20年以前にあった堀と大正時代までの里船津家の見取り図

【下】元禄時代(1689年)に建てられた里船津本家の母屋(平成23年に区画整理のために解体された。)



延宝元年(1673)に建てられた沼田船津家の間取図。沼田船津家第九代船津静作の妻、「あい」が指図して、赤山の太工、小川吉兵衛に作成させたもので、頑丈な砂糖袋の裏側を利用して描かれており、沼田ばあさん指図とある。明治6年、船津静作を婿に迎えるときに取り壊された。



鳩ヶ谷宿本陣船戸家の建物、昭和の初期、里の真光寺の本堂として移築

一方里の船津家よりも先の延宝元年(一六七三年)に建てられた沼田の船津家の建物は、別図の通りで里の船津家より一回り大きい。

島十三丁五反七畝十五斗
計二十七丁六反 四畝二十七斗これは上沼田村分だけの持地

三代目の時、寛延三年(一七五〇) 下沼田分 一丁四反一畝二十七斗
高野村分 八反七畝三斗
宝暦二年(一七五二) 田十四丁七畝十二斗
田十三丁五反七畝十五斗

この付近から室町時代の板碑が発見されていることから、おそらく船津家始祖の船戸大学が入婿に入ったという石井玄蕃の頃からの屋敷地と考えられる。この敷地は二つに分かれており、左が船津本家(註二)、右が隠居船津家である。隠居初代の船戸安左衛門が亡くなったのは天保三年(二八三三)で、沼田船津家の七代船津久五郎が亡くなったのは、安政三年(一八五六)であるから、船津久五郎(文測)の頃の里船津家の屋敷配置はこの通りだったと思われる。

(3月号よりつづく)
*里船津本家の九代となった船津輸助がまとめた、『船津家系図稿』と『船津家系譜』の二冊による。
三代 船津徳右衛門重矩(庄三郎)
二代徳右衛門に子がなかったため、初代徳右衛門の三女松子と夫、久保田庄兵衛との間に生まれた息子、庄三郎が三代目を継いだ。
妻 塩子 松伏領赤岩村名主細野傳右衛門次女
三代目の時、寛延三年(一七五〇)
下沼田分 一丁四反一畝二十七斗
高野村分 八反七畝三斗
宝暦二年(一七五二) 田十四丁七畝十二斗
田十三丁五反七畝十五斗

宝暦十二年「元木村に萱野一丁七反五畝六斗所有せり」

これを合わせると三十町弱となる。子一、金重郎矩美 (のりよし)

寛延元年六月十五日卯上刻生まれ文化十二年六月二十二日亡、行年六十八歳。安永の頃一時家政をとる。「本来なら四代とすべきなり」(船津輪助記)

金重郎矩美の妻 吉子 親戚、会田平兵衛娘 安永九年六月離縁となる。土地を売り百両出し離縁したという。金重郎が芸者「とよ」と「アツクナリシハ安永八年なり」。金重郎は後に下谷三筋町阿部氏を継ぎ阿部兵左衛門となる。

後妻「とよ」(浅草馬道 指物屋治郎兵衛娘、芸者なり 越谷富田屋にて婚儀ありし晩来たりし芸者なり) 三代直筆の古文書による) を娶り阿部鉄五郎美忠を生む。

この芸者と道具店を諏訪町に一年ほど出したが、うまくいかず、妾として内へいれることになった。後、四丁五反もらい、江戸へ出て阿部氏となる。「とよ」が一時沼田にいたとき隠居(三代目)が、七番目の子どもである金松を跡取りの四代目にしようとし、「(金松に) 年始の挨拶をさせしとて金重郎怒り刀を帯びて隠居をおどす。」ということが起きた。「とよ」は天明三年五月二日離縁となる。

沼田の船津家にとって大事件であった、この金重郎矩美のことは沼田船津家の十一代船津金松氏より足立区立郷土博物館に寄贈された古文書(船津家文書)にある。それらの古文書は、

(一) 安永十年二月 譲り渡申一札之事 家督相渡申に付 差出人金重郎他四名 (文書番号 84・2)

(二) 安永十年二月十九日 差上申一札之事 身上不埒に付家督相続難成思召蒙り 御勘気可申候処親類兄弟共致 差出人 五郎左衛門 請取人 親父殿 (文書番号 84・7)

(三) 天明三年五月二日 入置申一札之事 娘とよ男子引取申候に付 差出人 とよ母とみ(爪印) 他一名 請取人 徳右衛門他一名 (文書番号 88・3・2)

子 二、徳之丞(利助) 明和六年十二月沼田村清水氏に入婿となる。名を利助と改める。持参の田畑(熊木耕地) 二丁十二歩 妻 えつ

後妻 つる 清水氏、しんやより養女 安永五申年九月一時追い出され安永六四年四月二十五日帰参。

利助も一時 不身持のため、追い出されその後帰参。村地面九丁四反六畝は利助の名目となり越石(こく)は母(名ろく)の持となるが、これ

は反別不明、「但し隠居面の内壱町歩はおまき方(註二)へ手当てのつもり云々」の文句あり。このことに関する古文書も足立区立郷土博物館にある。

明和六年十二月 請取申持参田地証文之事 貴殿二男徳之丞我等娘おえつ方江婿養子に申請候に付

差出人 上沼田村九左衛門他四名 請取人 徳右衛門殿 (文書番号 89・4)

子 三、すみ子 富田屋堀長右衛門妻 子 四、喜十郎 久保田氏に養子に入り改名、平助源為正、後年浅草姥ヶ池に住む 高野村の地をもらう

子 五、よし 早世 子 六、とみ 竹ノ塚村河内権蔵妻 子 七、金松 四代目

四代 船津徳右衛門重知(金松) 初名金松 三代の七番目の子 兼松とも書く。兼松は安永十年二月、金重郎より家督を譲られる。「兼松はさかぬ気の人なり。兼松大尽の名

遍く聞こえ今尚のこる。兼松は訴訟好きなり。役人の賄賂をとるを密訴す。寛政八年バクチャドをせしを訴ふ。」

それ故古文書も金松に関係が大部分である。古文書は足立区立博物館にはたくさん収蔵されている。

文政十三年(一八三〇) 八月没 行年六十六歳 妻 留舞子(るんこ) 竹ノ塚村河内氏娘、文化五年正月二十二日没

後妻 尚子 築地多賀左近一乗庵玄味入道の後室の妹 天明八年(一七八八)

田方 二百三十八俵と五石七斗 畠方 百六十三貫七百四十四文 文化元年(一八〇四) 小作米百十八俵

子 一、徳次郎 五代目 子 二、錦之祐 文化四年十二月没 子 三、亀之進 六代目 文政十一年(一八二八) 九月没

子 四、心暁童女 早世 子 五、恵光童女 早世 子 六、空性童女 早世 子 七、力子 長じて卒す 文化十三年八月二十二日亡

註一 鳩ヶ谷本陣の船戸家から分家した家はたくさんあり、里の船津家もそのひとつである。しかし、昭和初期に本陣の船戸家が鳩ヶ谷から退去して絶えてしまったことにより、里の船津家が通称「本家」といわれている。

註二 古文書では「おえつ」となっているが輪助氏の記録では「おまき」と記されている。

文測の日記から(一) 土用干しの記録

郷土博物館

船津文測は、安政三年九月十二日に亡くなる数日前まで、およそ八年間に渡る五冊の日記を残しています。

菜菴雑記 卷一・嘉永二(一八四九)

年正月〜嘉永四年六月

菜菴雑記 卷二・嘉永四年六月〜五年六月

菜菴日記(一)・嘉永六年六月〜七年十一月

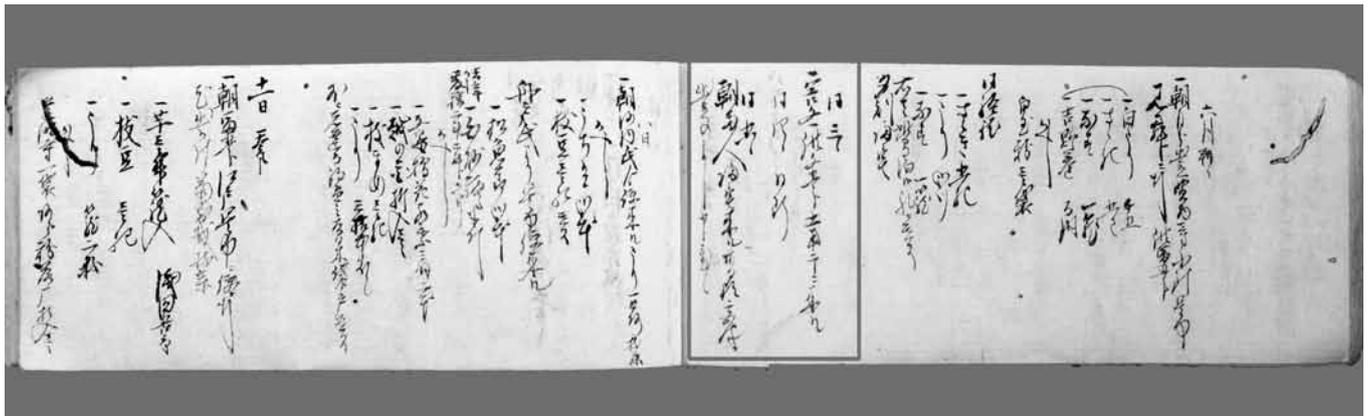
菜菴日記(二)・嘉永七年十一月〜安政三年三月

菜菴日記(三)・安政三(一八五六)

年三月〜八月二十五日

この日記を読むと、大農家の主人、地域の重役としての日常と、谷文晁の弟子である画家としての日常の二つの日常を知ることができます。日記の概要については、特別展図録『美と知性の宝庫 足立』に、古文書の解説を行った山崎尚之氏(元江戸東京博物館学芸員)がまとめられ、「画家の日記として」で、日記にどのような記述がされているのかを説明されています。また、同じく図録で、佐藤貴浩(当館専門員)が、「文測の日常」で紹介しているのでは非

覧下さい。



「文測雑記 卷二」 囲みの部分は【二】嘉永5年6月の土用干しの記述

日記のなかには、谷文一(二世)を初め、谷一門の絵師との付き合いがうかがわれる記述も多数見られ、貴重な記録となっています。

今回は、日記のなかに記載された文測の日常から絵の取り扱いは関わる事柄を少々紹介します。

■土用干し 現在では、消えつつある言葉ですが土用とは、二四節気の季節の変わる立冬、立春、立夏、立秋の前の一八日間のことで、そのうち夏土用は、立秋の前の「暑中」といわれる間で、暑く晴天が続く頃となっています。この晴れ間の続く時期に、梅雨を越した衣類や書物の風通し、また、梅干しづくりに、漬けた梅を日に干すことなどが行われていました。

これを土用干しといって、防虫剤などなかった時代には、衣類や書物の手入れをする家のなかの仕事のひとつとなっていました。

「曝書(ばくしょ)」という言葉もあり、これは書物を広げて風にあて、虫干しをするという意味で、夏の季節語となっています。この機会に蔵書を確認、整理するといったこともあります。難しい言葉ですが、現在でも図書館の蔵書点検の作業を曝書とよぶところが多く、虫干し作業から離れコンピューター管理になった現代でもその名残が見られます。

■日記に見る土用干し 文測の日記

には、この土用干しという項目が見られ、年によって異なりますが、六月から七月(太陰太陽暦)の二日間から五日間をかけていた様子が見られます。日記のなかでみられる土用干しの記述は五年分あります。

「菜菴雑記 卷一」
【二】嘉永4年7月

月朔日

一、土用干

同二日 天気

一、同用

同三日

一、同用

一、中處参ル。夕七ツ時頃即刻

四日 帰ル

一、同用

五日

一、同用

「菜菴雑記 卷二」
【二】嘉永5年6月

同三日

一、谷文一、供文五郎、土用干

二来ル

同四日 同断

同五日

朝兩人帰宅。来ル廿日頃宮津
出立のよし申置候

「菜菴雑記 卷二」
〔三〕嘉永6年6月

- 同二日 天気
- 一、本箱土用干
- 同三日 天気
- 一、本箱土用干
- 同四日 天気
- 一、本箱土用干
- 一、朝、いそ早朝出立、小針八十丸江戸江送り遣ス、供谷次郎。八十九事、五月九日来逗留今四日迄、日数廿五日目にて帰府
- 同五日 天気
- 一、土用干

「菜菴日記 (一)」
〔四〕安政2年7月

- 同五日 天気
- 一、土用乾本匣三ツ
手傳てる
- 同六日 天気
- 一、土用乾本匣一、小道具匣
つづら三口干、手傳てる
熊ノ木おけや、井戸かわ
たがかけ小細工ニ来
- 同七日 天気
- 一、土用干、掛物たんす二口
- 同八日 曇
- 一、取調かた付もの
一、麦搗初半十郎
福次郎
- 同九日
- 一、土用乾、画本つづら

- 同十日
- 一、小口土用干、二階
- 同十一日
- 一、取かた付もの

「菜菴日記 (二)」
〔五〕安政3年7月

- 同二十三日 天気
- 一、麦搗富五郎
- 一、福次郎、千住前裁二行
- 一、深川おみち殿、鳩谷江行
かけ参り泊、雪の下巻袋
土産参ル
- 一、昼後地震有之
- 一、本匣土用干、初ル
- 同廿四日 天気
- 一、孟茶盆二付かいもち出来
- 一、おみち殿、朝めしたへて
鳩谷へ行
- 一、麦搗半日分富五郎
- 一、昼時より奉公人休
- 一、中村半兵衛、なし十九持
参そうめん出しうちは式
本遣し夕刻帰
- 一、自分灸事
- 一、本匣土用干□□いたし

ここに記された土用干しは、「本箱」と記されているように、書物類が中心で、土用干しにあてる日数や、他の仕事を入れていないことからも、かなりの量があったことがうかがわれます。特筆すべきは、〔二〕

の嘉永五年の土用干しで、谷文一(二世)が、文五郎を共に連れて、泊まりで土用干しに来ていることです。土用干しは、単に虫干し作業をするだけではなく、この機会にしまつてある蔵書類を広げて見るといふ意味もあります。文一たちが、文測の所蔵する資料類を泊りでじっくりと見に来ているということがわかります。絵師の土用干しは鑑賞会ということでもあり、そのために、別の仕事を入れずに、集中して行っているでしょう。

【四】の安政二年の土用干しを見ると、娘のてるに手伝わせて行っています。本匣(本箱)四つ、小道具のつづら三つ、掛け物(掛軸類)のたんす二口、画本のつづらなどを扱っており、これらのなかの資料を広げてしまうだけでも大変です。特別展で展示している資料や現在、当館で研究のためにお預りしている資料の点数からも想像できますが、絵画と書籍の分量の多さと、当時の絵師達が興味を持つその内容は相当なものであったと思われます。

一般の家であれば、おもに衣類の虫干しが中心となると思われますが、文測の土用干しは大切な絵や資料を手入れする仕事で、また、じっくりとそれらに向き合うことのできる時間であったのではと想像されます。

葛飾北斎「富嶽三十六景」
顕彰碑が建立されました

葛飾北斎の名作「富嶽三十六景」には、千住を題材とした作品が三点あります(うち、二点が足立区内を描いています)。この作品の顕彰碑が、郷土博物館の協働グループでもあるNPO法人千住文化普及会の活動によって建てられ、3月19日に序幕式が行われました。

顕彰碑には、浮世絵と浮世絵に描かれた場所の地図が示されています。

浮世絵がどこを描いているのか、現在ではわかりにくくなっています。が、史跡巡りに訪れる方もこの地図を見ることができ、詳しくは郷土博物館HPでご案内します。

富嶽三十六景顕彰碑の場所

- 「武州千住」・・・千住桜木1-15-4
元宿堰から見える隅田川と富士
- 「隅田川関屋の里」・・・千住仲町公園
千住仲町28-1
墨堤通り(掃部堤)を疾走する馬と富士
- 「従千住花街眺望ノ不二(せんじゅはなまちよりちようぼうのふじ)」・・・大橋公園
千住橋戸町(千住大橋北詰)
荒川区側の千住宿から描いた富士